



Title	スウィフトのプライド観(Ⅱ) : The Battle の場合
Author(s)	渡辺, 孔二
Citation	Osaka Literary Review. 1963, 2, p. 20-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25767
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スウィフトのプライド観 (Ⅱ)

— *The Battle* の場合 —

渡 辺 孔 二

散文に目を向けて Swift のプライド観を調べてみる。まず、今回は彼の初期の散文とみなされている *The Battle of the Books* の中で、彼のプライド観がどのようにあらわれているかを論じてみたい。

The Battle は1697年6月から1698年3月の間に書かれたとみなされている^①。1690年、Sir William Temple は *Essay upou the Ancient and Modern Learning* を世に問い、ルネッサンス以来、ヨーロッパに広がっていた新旧論争に首をつっこんだ。それに対し、William Wotton 及び Richard Bentley はそれぞれ、*Reflections upon Ancient and Modern Learning* (1694)、*Dissertation upon the Epistles of Phalaris* (1697)^② を書き、Temple の modern learning 軽視に挑戦した。即ち、Temple は ancients の側につき、片や、Wotton, Bentley は moderns の側について、彼らの意見を展開した。当時 Swift は30才前であり、1696年には prebend をしていた Kilroot を去り、Moor Park の Sir William Temple のところへもどっていたが、当時の彼は、その頃の彼の詩にもみられるように、pedants への烈しい怒りにもえていたのである。

Censure, and Pedantry, and Pride,
 Numberless Nations, stretching far and wide,
 Shall (I foresee it) soon with *Gothick* Swarms
 come forth
 From Ignorance's universal North,
 And with blind Rage break all this
 peaceful Government :^③

その原書かれたのが *The Battle* であり、その *The Battle* の書かれた動機、又、この作品自体に対する評価は様々であるが、次の三種に大別出来るであろう。

- (1) 彼の patron である Temple の説が、Wotton や Bentley 等の批評家の槍玉にあがっていることを知った Swift が、Temple を助けようとして筆を起し、*The Battle* を通して、終始一貫、Wotton や Bentley 等、彼の眼には pedants と映じる人物を攻撃した。
- (2) *The Battle* は Temple を助けるためというよりはむしろ、Wotton、Bentley 等、彼の癪にさわる人物をからかうために書かれた。
- (3) *The Battle* に脈打っている思想は *A Tale of a Tub*, *Gulliver's Travels* 等、一連の彼の作品にみられる人間性豊かな思想に通じている。

このように *The Battle* の書かれた動機、或いはその評価はまちまちではあるが、Swift その人によって書かれたこの作品において、Swift のプライド観の片鱗をみつけようとする試みの妥当であることを信じて筆を進める。

I. *The Battle* という作品には *Proud, Proudly* ということばは一つも見当らず、用いられていることばはすべて *Pride* という名詞形のみである。(全体で7語。)。このことは彼の他の散文、例えば、*A Tale of a Tub* や *Gulliver's Travels* に比して珍しいことであり、*Pride* と *Proud* ということばに例をとってみても *A Tale of a Tub* ではその語数の比が7:1、*Gulliver's Travels* ではその比は9:4にもなっているに対し、*The Battle* では7:0という比率を示している。

II. *The Battle* の文体には一つの大きな特徴がある。それは二段構えということである。その二段構えの最初のものは *War is the Child of Pride, and Pride the Daughter of Riches* (p. 217) という描き方であるが、そうした二段構えの例としては次のようなものが挙げられる。

- (1) *The Moderns* と *the Antients* という二勢力間の争い。
- (2) *The Spider* と *the Bee* との論争。
- (3) *Quarrel* と *War* という言葉の錯綜。
- (4) *Pride* と *Want* の対比。
- (5) *Pride* と *Ignorance* の結合。
- (6) *Criticism* と *Opinion* の関係。etc.

Ⅰ. と Ⅱ. の特徴からプライド観をさぐってみよう。

まず最初に出て来る *Pride* は *The Battle* の最初の部分にあらわれている *War is the Child of Pride, and Pride the Daughter of Riches* という二段構えの語句の中に用いられているものであるが、これらの語句は Swift のことばによれば *Annual Records of Time* を慎重に調べれば出てくる語句だと説明されている。ちなみに当時流行したカレンダーをしてみると、次のような語句があることがわかり、Swift の表現している語句はそのカレンダーの中の語句を模倣していることがわかる。^① Swift はこれらの語句のうち、*War is the Child of Pride* ということは、この *The Battle* を読めばわかることであるが、*Pride the Daughter of Riches* ということは、わかりにくいことであろうとのべている。なぜか。それは *Pride* が通常 *Want* に関連づけられているからであり、人々が仲違いするのは通常十分ものを持っていない場合であると考えられているからである。即ち、人間が争うのは *Lust, Avarice* のためであり、それらは *Want* に端を発している。例えば犬の社会を考えてみても、十分な食後は平和が保たれるのであるが、そこに大きな骨が出現し、各犬にとってその骨がないという意識がおこる場合、*Lust, Avarice* が作用し、またたく間に *Quarrels* がおこるのである。即ち、*Quarrels* の根拠は *Lust, Avarice* であり、それらは *Want* から生じている。ここまでいくと、一見 Swift の論理は矛盾しているかにみえる。即ち、*War is the Child of Pride* ということは否定され、*War is the Child of Want* となっている。しかし、ここでそのような判断を下すことは早計である。

さらに深く検討してみよう。Swift はわざわざ *War* と *Quarrel* ということばを使いわけ、しかも *Lust* や *Avarice* は *Pride* の傍系ではなく（そう思われているに過ぎないことわっている）、*Want* の子孫であると述べている。この二点にさらに焦点をあててみる。

もう一度整理しておくとして Swift のこれまでの論理の進め方は複雑微妙ではあるが、次のような関係がなりたつ。即ち、*Pride* は *War* を生み、*Pride* は *Riches* から生じているということと、*Quarrel* は *Lust, Avarice* から生じ、*Lust, Avarice* は *Want* から生じているということである。即ち、*Riches* → *Pride* → *War* ; *Want* → *Avarice*,

Lust → Quarrel という関係式である。

さて、ここで *War* と *Quarrel* との違いがもしあるとすればどこにあるか、その語義からさぐってみよう。

War が 'any kind of active hostility or contention between living beings, or of conflict between opposing forces or principles' であるに対し、*Quarrel* は 'a ground or occasion of complaint against a person, leading to hostile feeling or action' である。

即ち、*War* が active hostility を有しているに対し、*Quarrel* は complaint を有しており、hostile feeling を惹起する性質があるが、果して hostile feeling から active hostility に人間を追いやるのは *Quarrel* の有している complaint そのものによってであるのか。ここに問題がある。

Swift はこの *Quarrel* から *War* への進展に介在しているのが何であるか、それを *The Battle* を通して論じている筈であり、もし Swift が *Quarrel* と *War* とを *The Battle* において同一視しているとすれば、彼の論理は、はっきりと矛盾を呈していることになる。即ち、*Pride* と *Want* の混同がおこなわれており、彼の説く *Avarice*、*Lust* が *Want* から発しているとする説は矛盾を帯びたものということになる。果して Swift は *War* と *Quarrel* を混同しているのであろうか。最初述べた *War* が *Pride* から発しているという説はこの *The Battle* を読めばわかるということは嘘なのであろうか。

前にも述べたように *Quarrel* の「最も古い、最も自然な根拠」は *Lust*、*Avarice* であり、それらは *Want* から発している。即ち、*Quarrel* の有している complaint という性質は *Want* の状態から生じている。そして、この complaint の状態に *Jealousies* や *Suspensions* が生じて来るとき、hostile feeling が起り、Swift のことばを用いれば *a manifest State of War* (p. 219) になる。ここまで来ると *Quarrel* から *War* への進展の過程に *Want* から発した *Lust*、*Avarice* の他に、何かが介在することが明らかとなる。即ち、そのなにかとは *Jealousies* や *Suspensions* を惹起さす人間性そのものである。Swift はその人間性解明のために、今までの犬の世界への論究から、知的世界の論究へと筆を進め、Parnassus の二つの頂のうちの一つの頂にある小さな地点で起った事件

を取り扱っている。

Swift も書いているようにこの事件は最初は *Antients* と *Moderns* との間の *Quarrel* であつた。^⑧ 即ち、*prospect* を問題とする *Quarrel* であつた。はじめは他愛のない *Want* からの *Quarrel* であつた。しかし、*Quarrel* は *Quarrel* としてとどまらず、さらに深い内部的事情を内包し、*Quarrel* から *War* へと進展していく。そのことは、*to avoid a War* (p. 220) という語句で暗示されている。さて、*Antients* は *Moderns* の申し出 (*Antients* の頂を低くすること) は *Folly* か *Ignorance* (p. 220) によるものであるときめつけ、*Moderns* の申し出を受けつけない。その上、*Moderns* に *Antients* の頂を低くすることなど夢見ないで *Moderns* 自らの頂を高くするよう忠告するが、こうした忠告は、*Moderns* により *much Indignation* (p. 221) をもつて拒絶された。そしてこうした見解の相違、即ち、頂を高くするか低くするかについての見解の相違に何かを加味されて *a long and obstinate War* (p. 221) へと進展する。ここで注意しておかなければならないことは最初 *prospect* を問題とする *complaint* からはじまった *Quarrel* であつたのが、*Moderns* の申し出、*Antients* の忠告、*Moderns* の拒絶を経て、次第に相互に *hostile feeling* を抱くようになり、ついに *War* へと進展したということである。ここに至ってはじめて *War is the child of Pride, and Pride the Daughter of Riches* という語句が意味を有して来るようになる。即ち、次に展開されるのは、*Want* の状態からの *Quarrel* ではなく、*Riches* から生じる *Pride* であり、*Pride* から生じる *War* というものである。ここまで来ると、今までの *Want* を根源とする *Quarrel* ではなく、*Pride* を根源とする *War* についての論究となる。ここでは、そのうち、*War* を生ぜしめる *Pride* にさらに問題を限定して論じてみよう。

Possession, Prudence, Antiquity, Merits (p. 227) などに関しての *Antients* と *Moderns* との議論のとき発する *Moderns* のことばにまず耳を傾けてみよう。

'Tis true, we are informed, some few of our
Party have been so mean to borrow their
Subsistence from You ; But the rest, infinitely
the greater number (and especially, we French

and English) were so far from stooping to so base an Example, that there never passed, till this very hour, six Words between us. For, our Horses are of our own breeding, our Arms of our own forging, and our Cloaths of our own cutting out and sowing. (pp. 227-228)

ここで暗示されていることは *Moderns* の *Want* ではなく、*Moderns* の *Riches* への幻である。^⑧

馬や武器や衣服への言及も、すべては *Moderns* の *Riches* に対する幻から生じている思い上りへの指摘であり、*Riches* というものへの過信から生じる *Pride* への暗示である。さらにこうした *Pride* への暗示は、*Spider* と *Bee* の出現により、さらに詳しくなされている。

Spider は *Bee* の到来により身の危険を感じ、狂人のように *Bee* をののしる。それに対し、*Bee* は余裕ある態度で応答するのであるが、*Spider* は *Bee* の言うことには少しも耳を傾けようとはしないで次のようにいうのであるがその態度は、*A Tale of a Tub* における Peter の態度や *Gulliver's Travels* における諸々の登場人物の思い上った態度に一脈通じるものがあり、Swift の忌み嫌う人間の傲慢さへの憎悪が感じられる。

Not to disparage my self by the Comparison with such a Rascal ; What art thou but a Vagabond without House or Home, without Stock or Inheritance ; Born to no Possession of your own, but a Pair of Wings, and a Drone-Pipe. Your Livelihood is an universal Plunder upon Nature ; a Freebooter over Fields and Gardens ; and for the sake of Stealing, will rob a Nettle as readily as a Violet. Wheareas I am a domestick Animal, furnisht with a Native Stock within my self. This large Castle (to shew my Improvements in the Mathematicks) is all built with my own Hands, and the Materials extracted altogether out of my own Person. (p. 231)

こうした Swift の憎悪を呼び起す傲慢さはいかなる態度に是正されねばならないのか。

人間の一時的豊富さに支えられた傲慢さの否定ということは、Swift にとっては、とりもなおさず神の意志に率直に従うことであり、神の意志に従ってはじめて真の人間の自信は生じ、豊かさはその実を結ぶのである。Swift はそのことを暗示さすかのように、次のように *Bee* に語らせている。

I am glad to hear you grant at least, that
I am come honestly by my Wings and my
Voice, for then, it seems, I am obliged to
Heaven alone for my Flights and my Musick;
and Providence would never have bestowed
on me two such Gifts, without designing them
for the noblest Ends. I visit, indeed, all the
Flowers and Blossoms of the Field and the Garden,
but whatever I collect from thence, enriches
my self, without the least Injury to their
Beauty, their Smell, or their Taste.

.....
So that in short, the Question comes all to this ;
Whether is the nobler Being of the two, That
which by a lazy Contemplation of four Inches
round ; by an over-weening Pride, which
feeding and engendering on it self, turns all
into Excrement and Venom ; producing nothing
at last, but Fly-bane and a Cobweb : Or
That, which, by an universal Range, with long
Search, much Study, true Judgment, and
Distinction of Things, brings home Honey and
Wax. (pp. 231-232)

Swift は *Bee* にこれだけ語らせて *Bee* をバラ園へと飛びたたせている。あとに残る余韻は大きく尾を引いて我々の胸底に食い込んでくる。*Spider* は我が身を守る巣や毒液を余りにも過信している。しかし、*Spider* の巣も毒液も、確かに彼の有している一時的豊かさには相違ないが、それらはあくまで *Spider* という生き者の幸せをつかみとる場合のみに有効であ

り、その豊かさへの傲慢さはややもすれば争いを生み、しかも彼をその争いにより滅亡さす可能性を濃厚に有しているのである。クモの巣の幾何学的精密さへの自慢も、毒液の強力さへの傲慢さも空しい思い上りといわねばならない。Spider と Bee の論争も、そして又、Spider のみにくさも、Spider の Want からではなく、Spider の Riches から生じる Pride に起因しているのであり、そのことは Bee の去った後、すぐ続いて述べられている Moderns と Antients の戦いの烈しさに引き継がれて重ねて述べられている。Criticism の傲慢さ (p. 241) も、Gondibert (Sir William Davenant) の狂人ぶり (p. 245) も、Bentley の自力への過信 (p. 252) も、Wotton のみにくさ (p. 255) も、すべては、Spider の場合に一脉通じる Riches から生じる Pride の生み出す悪であり、限界をわきまえぬ Pride に対する Swift の辛辣な態度に基づかれた表現である。Pride に起因する hostile actions は、The Battle の後半に繰り返し繰り返し述べられているのであるが、今は、そうした hostile actions を暗示さす Swift の特異な表現に静かに耳を傾けてみよう。

Mean while, *Momus* fearing the worst, and calling to mind an antient Prophecy, which bore no very good Face to his Children the *Moderns* ; bent his Flight to the Region of a malignant Deity, call'd *Criticism*. She dwelt on the Top of a snowy Mountain in *Nova Zembla* ; there *Momus* found her extended in her Den, upon the Spoils of numberless Volumes half devoured. At her right Hand sat *Ignorance*, her Father and Husband, blind with Age ; at her left, *Pride* her Mother, dressing her up in the Scraps of Paper herself had torn. There, was *Opinion* her Sister, light of Foot, hoodwinkt, and headstrong, yet giddy and perpetually turning. About her play'd her Children, *Noise* and *Impudence*, *Dullness* and *Vanity*, *Positiveness*, *Pedantry*, and *Ill-Manners*. (p. 240)

〔注〕

- ① Ricardo Quintana : *The Mind and Art of Jonathan Swift* (London, 1953) p. 76 を参照のこと。
- ② Wotton の *Reflections* の第二版に付け加えられたもの。
- ③ *Ode to the Athenian Society*, 296-300.
- ④ Ricardo Quintana : From end to end *The Battle of the Books* is satire of personality. (p. 76)
- ⑤ John Middleton Murry : It is manifest that Swift's main purpose in *The Battle of the Books* is not to come to the rescue of Temple (who did not need it) , and still less to make a contribution to the controversy (which had now become irrelevant to Temple's real thesis) , but to make fun of Wotton and Bentley and Dryden and anybody else who comes into his head—not wholly excluding Homer himself. *Jonathan Swift* (London, 1954) p. 76
- ⑥ Kathleen Williams : Even *The Battle of the Books*, starting from the literary argument in which Sir William Temple had so unfortunately involved himself, has behind it a firm conception of the nature of man, and from the *Battle* and the *Tale to Gulliver's Travels* this conception is essentially unchanged though experience strengthened and deepened it. *Jonathan Swift and the Age of Compromise* (London, 1959) p. 121
- ⑦ War begets Poverty,
Poverty Peace :
Peace maketh Riches flow,
(Fate ne'er doth cease :)
Riches produceth Pride,
Pride is War's ground,
War begets Poverty,
(The World) goes round.
(テキスト p. 217の注1による.)
- ⑧ Swift 自らも次のように述べている。
‘War is an attempt to take by violence from others, a part

of what they have, and we want.'

John Nichols (ed); *Works of Jonathan Swift*, (London, 1801)
Vol. I. p. 282

しかしこの場合の War ということばは限定的意味しか有していないことを附記しておく。

⑨ N. E. D. による。

⑩ *the present Quarrel* (p. 219), *this Quarrel* (p. 219), *complain of* (p. 220) と用いている。

⑪ Swift は *A Sermon on Mutual Subjection* において, '.....great riches are no blessings in themselves.' (*Works*, Vol. X, p. 41) と述べている。

※ テキストは A. C. Guthkelch and D. Nichol Smith (ed.) : *A Tale of a Tub to which is added The Battle of the Books and the Mechanical Operation of the Spirit*, (Oxford, 1958) を用いた。本文中の引用ページ数はすべてこのテキストによった。